

日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

| | |
|-------|---|
| タイトル | マーケヴィッツ伯爵夫人とイエイツの詩 |
| 著 者 | 徳永 哲 |
| 掲載誌 | 戦争と文学(梅光学院大学公開講座論集 ; 49). pp 101-122. |
| 発行年 | 2001.11.15 |
| 版 | publisher |
| U R L | http://id.nii.ac.jp/1127/00000303/ |

<利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

徳永 哲

マーキエヴィッツ伯爵夫人とイエイツの詩

アイルランドの西北に位置するスライゴの市街地からバスに乗って北へ二〇分ほどで、詩人 W・B・イエイツの墓があるドラムクリフに着く。そこからドラムクリフ湾を左手に見ながら六、七キロ歩くと灰色の石造りの古い館、リサデルハウスに着く。リサデルハウスは一八三〇年頃に建てられた地主ゴア・ブース家の屋敷である。この屋敷は、現在、記念館として一般に公開されている。その屋敷の中には、北極地方の探検家として名高かったゴア・ブース家ヘンリー卿が鯨捕りや北極での狩猟に使用した道具やリサデルハウス近辺の森や海岸に渡ってきた野鳥の標本などが展示されている。

W・B・イエイツは、一八九一年に「妖精の国を夢みた男」と題して詩を書いている。

妖精の国を夢みた男

・・・

男はリッサデルの浜辺にでかけて、さすらった。

めぐらす思ひは金もうけの苦勞と心配ばかり。

だもの、丘のふもとに自分の墓が築かれるまゑに

ついに、つましく金ためて何年も暮らせたろうに。

ところがなんと、ぬかるみの前を通っていると、

くろむしが、灰色の、泥んこまみれの口あけて

こう歌ったのだ。北か西か南かのどこかには

黄金色か白銀色なして大きくひろがる空のもとに

ほがらかで、歎びにひたる、心やさしい種族^{やから}が住み、

踊っていて、ひもじいときに、足をやすめれば、

太陽と月が果実をたわなに結ぶかにみえるのよ、と。

この歌を聞き、男はもう金の分別もどこへやら。

・・・
(鈴木弘訳)

「ぬかるんだ」リッサデル（詩の中では「リッサデル」となっている）の海岸は、夜になると妖精が踊ったとされているロセス岬の砂浜とドラムクリフ湾を挟んで北側に相對する干潟の多い浜で

ある。その浜も妖精の住処とされている。

イエイツの一家は父親ジョンの画家になりたいという気まぐれな野心のためにアイルランドからイギリスへ渡った。母親スーザンはスライゴの生活を忘れることが出来ず、ロンドンの都会生活になじめないまま、一九〇〇年に孤独のうちに寂しく死んでいった。この詩の中の「男」とはイエイツ自身であろうが、故郷を捨て、「夢」を捨てたスーザンを含めた人々が現実の柵の中で、遠くになった想い出の場所へ夢の中でたどり着いているようにもとれる。詩の中では「ぬかるみ」、「灰色」、「泥んこまみれ」という語が象徴的に使われている。いわゆる日常の柵、特に経済的柵を逃れて、「男」は「どこか」にある「黄金色」、「白銀色」に輝く世界で「心やさしい種族」すなわち妖精と出会うことができ、喜びにひたる。

この詩の「心やさしい種族」とは、妖精だけでなく、実際に存在していたリッサデルハウスの住民であるかもしれない。イエイツは子供の頃、祖母の馬車に乗せられてブルペン山へ向かう途中、ロセス岬の小高い草むらから、木立の中にあるリッサデルハウスの灰色の石壁を見ていた。遠目にリッサデルハウスへの憧れのようなものを抱いていたのかもしれない。

そのリッサデルハウスの長女コンスタンスにイエイツがはじめて会ったのは何時か定かではないらしいが、少年から青年になろうとしていた頃のものである。コンスタンスは乗馬が好きで、狩から帰る途中に男性のような手綱さばきでイエイツのすぐ脇を駆け抜けていったことがあった。ブルペン山の裾野を自由に何憚ることなく駆け抜ける美しいコンスタンスの姿はイエイツの心に鮮烈なイ

メージとなって残ったに違いない。人々の日常とはかけ離れた所に存在する美しい人々がリサデルハウスには住んでいたのである。リサデルハウスとその住人への憧れが妖精の国と重ね合わされているとも考えられる。

リサデルハウスのゴア・ブース家にまつわる話はアイルランドの歴史の中にも残されている。それはジャガイモ飢饉の最中のことである。ジャガイモ飢饉というのは、一八四五年秋から一八四八年にかけてアイルランド全土にジャガイモの大凶作が続き、食料を全面的にジャガイモに依存していた西部の貧しい小作農民たちが餓死したり、病死して、結局百万人に及ぶ犠牲者が出た世界の歴史上まれに見る出来事であった。一八四七年はその飢饉の犠牲者が最も多く出て、多くの村が全滅した。スライゴ地方もジャガイモ飢饉の大きな痛手を受けていた。その飢饉の最中に、ゴア・ブース家の主人ロバート卿は小作農民の父親代わりとなってよく面倒を見たということである。彼自身、事業を起こし小作農民を雇用して飢えから救ったらしいが、一方で飢えに苦しむ小作農民を積極的に海外へ送り出したことでも有名である。

一八四七年という年は地主階級にとって、多分初めてであろう大きな試練の年となった。その年の始めに、アイルランド・イギリス合併国政府は、飢えた小作農民への救済事業にかかる費用を地主が納める地方税から支出する方針を立てた。地方税が大幅に引き上げられた。地主に小作農民の飢餓を救う義務が押し付けられたのである。このことは必然的に地主階級の経済を圧迫することになった。土地も家も捨てて海外へ逃れる地主もいたほどであった。また、冷酷な地主は地代の支払

い能力の無い小作農民を追い立てた。追い立てられた小作農家族は野をさまつた果てに餓死あるいは病死した。ロバート卿は、残酷な追い立てをするよりは、輸送船と契約し、その船でカナダなどの外国に送り出したのである。

しかし、彼は、自分の領地の貧しく弱い立場にある人々を掻き集めて海外へ送り出したことで、政府移民局から非難された。そうした非難に対して、ロバート卿は国全体が貧民であふれており、追い立てることなく、国外へ送り出すことはむしろ人間的なやり方であると反発した。

実際、アイルランド・イギリス合併国政府のもくろんでいた事はアイルランドの人口削減と農地の合理化であった。アイルランドには人口が多すぎて、人を減らさない限り農地の近代化は成しえなかったのである。合併国政府の要職を独占するイギリス人の中には、ジャガイモ飢饉はまさに天の恵みで、神が政府の方針を助けているとさえ言う者もあったらしい。しかし、ロバート卿のように一方的に海外に送り出すとなると、合併国政府は外国から政策の非難を受けることになりかねなかった。それでロバート卿への政府移民局からの風当たりは強かったと考える。

ロバート卿の大胆な発想や実行力は息子ヘンリー卿に受け継がれたようである。ヘンリー卿は先に書いたように有名な探検家であった。そして、その娘二人コンスタンスとエヴァも家柄や家系にとらわれない自由で個性的な生き方をした。

特にこの小論では、コンスタンスについて述べたい。

一八六八年、ゴア・ブース家の長女に生まれたコンスタンスは一八九四年パリへ美術留学をした。

そこで、同じくポーランドから美術留学をしていたカシミール・ダナン・マーキエヴィッツという貴族と出会い、ロンドンで結婚した。一九〇三年、コンスタンスは夫と共にダブリンに戻り、郊外に居を構え、優雅な生活を送った。そして、社交界の花となった。しかし、一九〇五年頃のダブリンの労働者は貧困に喘いでいた。しかも、社会主義が労働者の中に浸透し始め、その影響が現れつつあった。コンスタンスはその現状を知りようになり、やがて、幼い娘メーヴを乳母と家庭教師に任せて労働者の闘争や国の独立運動の中へ足を踏み入れていったのである。

コンスタンスがまず最初に関係したのはシン・フェイン党であった。シン・フェイン党は「われら自身」を意味するアイルランド語であるが、一九〇七年にアーサー・グリフィスが設立し、急進的なナショナリスト運動を展開していた。運動目標はアイルランドをイギリスから分離させ、独立した自治国とすることであった。実際には、立法府や経済をイギリスから独立させ、アイルランドの行政機構をアイルランド人自身の手によって運用することを目指していた。しかし、グリフィスはイギリス王室を否定してはいなかった。グリフィスは、イギリスという国を、イギリス王室支配の下で、宗教とは無関係に世界の経済征服を目指す国だと理解していた。そして、アイルランドがイギリスと合併国となっていたために農業植民地にまで下がり下がってしまったのだと考えた。本来アイルランドはイギリス王室の下で、自治国としてカトリックとプロテスタントが一致協力するならば、イギリスとは対等に協力関係を築いていくことのできる国であると考えていた。そのような考えを抱くグリフィスはコンスタンスは会い、党評議員となった。

一九一〇年頃のアイルランドはまったく考え方の異なる二つの国家が出来始めていた。一つは、アルスター地方、今日の北アイルランドで、イギリス国王との繋がりを強め、イギリスからの分離を絶対に望まないプロテスタントが多かった。もう一つは、北部を除くカトリックが九〇パーセントを占める、今日のアイルランド共和国で、イギリスから分離独立し、共和国を目指していた。このまったく異なった国家を目指す二つの勢力は、それぞれ義勇兵を組織し、どちらもドイツなどから武器を購入して力を蓄えようとしていた。アルスター義勇兵組織は着々と強力になっていったが、アイルランド義勇兵組織はイギリス軍の徹底的な監視下にあつて武器を手に入れることは困難であった。

一九一二年にアイルランド自治国法案が政府下院に提出された。その時からアルスター地方のプロテスタントが一斉に自治国法案反対の署名活動を始めたのである。署名活動をしたプロテスタントはスコットランドから移住してきた厳格なカルヴィン主義を抱く長老会派の人々であった。彼らは十七世紀になってアイルランドへ渡ってきたが、彼らは先に渡って来ていた古くからいるイギリス人とは違っていた。新しく来たイギリス人はアイルランド古来の文化や生活をまったく受け入れることなく、森林を切り開き、土地を耕し、勤勉に働いた。彼らの生活様式はアイルランド人のものとはまったく違っていて、しかも、水と油のように互いに決して交わることはなかった。信仰のあり方も同じキリスト教でありながら、まるで違った別の宗教のようであった。彼らは土着の迷信や聖人信仰をまったく受け入れなかった。そしてその信仰ゆえに、また、イギリス国王への忠誠心

ゆえに、アイルランド人に対してゆるぎない優越意識を抱いていた。彼らがイギリスから離れてアイルランド・カトリックと一緒に自治国を建設するということは多分屈辱的なことに思えたに違いない。彼らは自らをユニオニストと称し、四十万人もの署名を集め、自治国反対の大集会を開いた。そして、たとえ自治国法案が成立したとしてもユニオニストたちは完全無視することに決めてしまったのである。

コンスタンスはこうした激しい世の動きに対して、アイルランドは何より先にイギリスから完全に独立すべき、すなわち完全分離を主張した。そして、一九〇九年、コンスタンスは自由のために戦うアイルランド軍の基本となるべく、イギリスの向こうを張ったボーイ・スカウトを結成した。しかしアイルランドの少年を軍隊予備隊のように訓練することに、シン・フェイン党は快く思わなかった。それはむしろフェニアン運動の中核となっていたアイルランド共和国兄弟団（IRB）によって受け入れられた。

当時、アイルランドの女性の地位は低く、離婚はもちろんのこと、投票権は認められず、社会参加の自由や高等教育を受ける権利などはまったく保障されていなかった。それで、ダブリンには女性の自由や権利を求める集まりが出来ていた。しかし、そこに集まる女性の多くはそうした自由や権利をイギリスによって保障してもらうことを考えていたようである。コンスタンスはナショナリストの若い女性の集まり出かけて行つては、アイルランド国民の解放をうたった項目のない女性投票権協会に加盟するとは思いとどまるように主張した。

当時、アイルランドのリーダー的役割を果たしていた女性はプロテスタント系の裕福な家庭の出身者が多く、進歩的な考えを抱くにしてもシン・フェイン党の活動に同調するのが精一杯であった。彼女たちはアイルランドが英国の属国であっても、豊かで、諸々の権利や自由が保障されるようになるならば、それで十分満足できるものであったようである。コンスタンスはそうした女性たちと同じようにプロテスタントであり、教養もあり、豊かな生活を送るだけの財産もあった。しかし、彼女はすべての投げ捨てて、なりふりかまわずアイルランド独立のために戦ったのである。

イエイツの妹二人、リリーとロリーは当然のことながらプロテスタントであり、プロテスタントの教育を受けていた。二人は美貌もあり、教養もそれなりにあった。そんな二人にとって、コンスタンスの変貌振りを聞いても、同じプロテスタントであり、かつてリサデルで美しく着飾っていたあのコンスタンスが、今では男と同じ軍服を着て、銃を持っている姿を想像することは出来なかった。実際、少し頭が狂ってしまったとさえ思ったほどであった。当時の教養ある女性はイエイツの妹たちとあまり違わない考えを抱いていたかも知れない。

W・B・イエイツもまた、当時は妹二人とかわらぬ考えを抱いていたように思える。彼は詩「復活祭、一九一六年」のなかにコンスタンスのことを次のように書いている。

・・・

あの女はどの日も、昼間は

どうってことない慈善にすごし、
夜は夜で議論に費やして、

しまいには声がきんきん甲走った。

かつて彼女がういういしく、美しく

馬で猟犬連れて兎狩りしたころの

あの声に勝る美しい声があるだろうか。

・・・

(鈴木弘訳)

一九一六年のイースター祭の後、イエイツはイギリスで蜂起の知らせを聞いて書いたのがこの「復活祭、一九一六年」である。詩全体にイエイツ自身の驚きと戸惑いが感じられる。特にコンスタンスについては、イエイツは昔の思い出と蜂起前の彼女の姿とのギャップが、埋めようもないイエイツ自身の内的隙間として怒りに似た戸惑いとなって表されている。このコンスタンスがイエイツの心の中に産み出した不可解な隙間を、イエイツは自らの思索と努力によって自分で埋めていかねばならないことになる。「あの女」と呼ばれているコンスタンスは、ある意味では、自分自身の全人生をイエイツの思索の中に差し出したといえるのかもしれない。

コンスタンスが「どうってことない慈善にすごし」た一九一〇年頃のダブリンは世界でも稀な貧困都市であった。ダブリンは織物産業が盛んな都市であったが、近代化の波に乗ることが出来ず、

工場の閉鎖が相次ぎ、失業者が街にあふれていた。そんな中に、社会主義がヨーロッパから入ってきて、物資と職を求めて組合が組織され、運動が展開されるようになった。

ムーディ編『アイルランドの風土と歴史』には「二万一千世帯が一部屋を借りて住んでおり、千人につき二七・六人という死亡率は、ヨーロッパのどの都市よりも高率だった」(註1)と書かれている。まさに、パンと薪が何よりも求められていたのである。そういう状況にあつてはアイルランド独自の文化や伝統を論じても何の意味もなさなかった。貧しい労働者と雇用の対立は激化する一方であった。お金や物資をめぐる目先の効用がすべてとなつてしまったのである。

一九一三年の八月に、労働者組合と経営者連盟の対立から起こった経営者側のロックアウトはアイルランドの歴史に残る恥辱的な事件へと発展した。

ムーディ編『アイルランドの風土と歴史』によると、次のように書かれている。

マーフィーは約四百人の経営者で連盟を組織し、ラーキンの組合の労働者に対してロック・アウトを決定した。九月末までに二万四千人がロック・アウトされた。激しい闘争が八カ月以上も長引いて続いた。ダブリンでは大デモ行進が行われ、警官の棍棒の攻撃によって多数の負傷者と二人の死者が出た。騒動、逮捕、投獄、イギリスの支持者からの食料船、同情ストライキが続いた。(註2)

マーフィーは、ロック・アウトと警察の力によって多くの労働者を窮地に追いやったばかりではなかった。リバプール生まれのアイランド人であり、親の代からイギリスとアイランドの労働運動のリーダーであったジェイムス・ラーキンが、労働者の子供たちを飢えから救おうとイギリスに一時預かってもらう計画をたてた。しかし、マーフィーは信仰上の問題を持ち出し、カトリック教会に訴え、それを阻止してしまったのである。理想も夢も見失い、ただひたすら目先の利益をめぐって対立し、争い、子供の命さえ平気で犠牲にする、まさにアイランドの精神は地に落ちてしまったのである。

ラーキンはアメリカへ渡ったために労働運動のリーダーはジェイムス・コノリーに代わった。彼はイギリスの労働者にアイランド支援のゼネストを呼びかけた。しかし、これは失敗に終わった。ストライキは階級闘争のように見えたが、その実はアイランドの独特な、特殊な問題を秘めていたのである。

コンスタンスは交通ストライキに参加し、労働者を支援した。ロックアウトされると、自らリバティホールで、スूप・キチンを運営し、飢えた労働者やその家族のために食物やミルクを提供した。実際コンスタンスのおかげで多数の子供や親たちが飢餓から救われた。

ジェイムス・コノリーの指揮の下、アイランド市民軍がつくられ、コンスタンスはそのメンバーになった。しかし、それにはちよつとした逸話があった。コンスタンスはアイランド義勇兵組織とも関連があると見られ、オケイシーのようにコンスタンスを市民軍から切り捨てようとする動

きも生じたのである。彼女の去就をめぐって投票がなされたが結局圧倒的にコンスタンスに味方する票が入り、オケイシーが市民軍との関係を切ることとなったのである。

一九一四年、第一次世界大戦がはじまり、アイランドからも義勇兵がイギリス軍に入隊した。

アイランド義勇兵はイギリスのために戦うのは表向きで、実はアイランドと似た立場にある小国ベルギーのために戦った。また、もう一つ目的があった。入隊してイギリスの近代的な武器を手することであった。コンスタンスの夫カシミールは自国ポーランドに戻り、陸軍に入った。二人は別居し、それぞれの国でそれぞれの敵と戦うこととなった。

コンスタンスはコノリーの指揮下でボーイ・スカウトや市民軍の訓練に明け暮れていた。そうした時にも、一九一六年のイースター武装蜂起は計画されていた。マックニールやピアスらが中心になってドイツから武器を密輸する計画を立てた。市民軍とアイランド義勇兵組織は共同戦線を張って、その入手した武器を手に世界大戦で手薄になったイギリス



コンスタンスの生家 リサデルハウス

軍をアイルランドから一掃するつもりでいた。一九一六年、中立国商船に偽装したドイツの巡洋艦が武器を陸揚げしようとしたが、それはすでにイギリス側の知るところとなっていて、巡洋艦は撃沈されてしまった。武器の入手に失敗したマックニールはイースター蜂起中止命令を出した。しかし、ピアスとコノリーは市民軍と義勇兵の総勢一六〇〇名を率いて四月二十四日、ダブリンの中央郵便局を占拠した。彼らは中央郵便局の上に三色旗を掲げ、アイルランドの独立とイギリスとの対等な立場での和平を表した。アイルランドは「緑」、イギリスは「オレンジ」、そして和平は「白」で表した。しかし、彼らの夢も旗もイギリス海軍の大砲によって無残にも砕け散ってしまった。

コンスタンスはその一九一六年イースター蜂起で、女性でただ一人軍服をまとうてイギリス軍と戦ったことでも有名である。彼女の軍服姿はセントステイヴンスグリーン・パークの中の銅像に見ることができる。当初、彼女は車の運転が出来たので医薬品の配送をしていたが、セントステイヴンスグリーン¹の守備隊に加わり、その副司令官になった。退却しながら近代装備したイギリス軍に抵抗したが、中央郵便局の司令部が全面降伏したのを受けて、守備隊も降伏した。

コンスタンスはキルメイナム刑務所に入れられ、死刑の判決を受けた。ピアスやコノリーなど首謀者の十五人が銃殺刑になったが、彼女は死刑を免れ、マウントジョイ刑務所に移され、さらにエイルズベリ女子刑務所に移された。その後、赦免され、デ・ヴァレラ大統領のもとで労働大臣にも就任した。しかし、一九二二年デ・ヴァレラはイギリス・アイルランド条約に反対して独立共和国支持派を結束し、新政府から脱退した。コンスタンスはデ・ヴァレラを支持し、アメリカ講演旅行

をしたり、国外へ逃れてイギリスで反条約運動を展開したりして、アメリカではアイルランドのジャンヌ・ダルクと評されたこともあったらしい。

W・B・イエイツはイギリスのエイルズベリ女子刑務所に入れられ、孤独な生活をおくっていたコンスタンスのことを次のような詩に書いた。

ある政治囚によせて

幼いころから我慢を知らなかった

彼女もいまはすっかり辛抱強くなり、

一羽の灰色の鷗は怖れ気もなく

彼女の独房に舞い降りてきて、

指で触れられてもじっとして

手から餌を受けて、ついばんだ。

その孤独な羽を撫でながら彼女は

ありし日を偲んだらうか。いまは

心は辛辣な観念にこりかたまり

思想は大衆の抱く敵意に同化させ、
盲人になり、盲人どもの指揮者となって
盲人のねそべる溝で汚水を飲む身だが。

遠いむかし、彼女が馬にのり狩場へと
ブルベン山の麓を駆けるのを見たが
彼女の住む田園地帯の美しさが
青春の孤独な野性味にひき立てられ
彼女の清らかな美しい成長ぶりは
岩場育ちの、海を行く鳥を思わせた。

はじめて高い岩場の巢のなかから
飛びだして、海を行き、または
風の上で体を操り、胸を嵐に叩かれて
高波立つ海の叫びを下に聞きながら、
黒雲のたちこめる天蓋にむかつて
じっと目を据える鳥を思わせた。

(鈴木弘訳)

一九一九年の一月に書かれたこの詩の構成は大きく二分できる。前半の第一節と第二節は観念の虜となって我を忘れて戦い、その罰として独房に入れられた。孤独な身の上となって鳥と孤独を紛らわせるコンスタンスの現実がリアルに描き出されている。後半の第三節と第四節は彼女が鳥となって飛翔している。第三節では、時間の中を自由に行き来し、第四節では、時代の荒波に立ち向かい戦い、そして、信実を見据えている。これはイエイツが先に書いた詩「一九一三年、九月」の第一節「野鴨たちはこんな世をつくるために／灰色の翼を荒波の上に羽ばたかせたのか」を想起させる。イエイツは「ロマンチックなアイルランド」を支えてきた英雄的人物たちを「荒波」に立ち向かう「野鴨」に喩えたが、コンスタンスをその英雄の中の一人に数えているのではないかと思える。コンスタンスは最後まで貧しい労働者のために身を捧げ、一九二七年、五十八歳で亡くなった。その年に書かれたのが次の詩である。

二人の女性（エヴァ・ゴア・ブースとコン・マアキエヴィッツを偲んで）

黄昏の光、リサデルの館^{やかた}

南に開いた大きな窓、

絹の「キモノ」まどえる姫たち二人、

一人は小羚羊の如く眼差優しく、
共々に容貌うるわしい。

しかし、荒れ狂う秋は、夏の花環より
花々を略奪する。

年嵩なる姫は死すべき宿命、
宥免により、無智朦昧の徒と

心を通じ、さみしい余生をものうくも過ごす。

余は、年若い姫の夢みるところを知らぬ、

——それはどこかの理想郷であろうか——

姫は年老いて皺だち、骨もあらわにやつれ果てても、
さすがに、かかる世の政略の表象かとみえる。

あまたたび、余は心の裡に、

姫たち二人のうち、いずれかを見出だして、

かの古のジョージ王朝ぶりの館の物語を

語らんとつとめ、心に映る象々を相交える。

思い出ずるは、かの卓、かの青春の言葉、

かの絹の「キモノ」まどえる二人の姫、

一人は小羚羊の如く眼差優しく、
共々に容貌うるわしい。

ああ、いともなつかしい姫達の幻影の姿よ。
いまにして、御身らはすべてを知る、

おしなべて世の曲直と争うことの愚かさを。

清浄の心の人と端麗の姿の人は、

時劫の外には敵をもたない。

甦って、余に火を点じさせ給え、

なお繰返し、くりかえし火を点じさせ給え、

時劫の燃えあがるまで。

・・・

(尾島庄太郎 訳)

この難解な詩を散文に書き換えてみると次のようになるであろう。

「リサデルハウスが夕闇の中にくつきりと浮かび上がる。南側の在る庭園に向けて大きく開け放たれた窓から日本の着物をまとったヘンリー卿の二人の娘コンスタンスとエヴァの姿が見える。二人ともとても美しい。エヴァは「小羚羊」のように優しい無垢な瞳で人を見る。

しかし、やがて時間の波は残酷にも二人を襲い、美しく咲き誇る二つの花を散らすように、二人

をまったく違った姿に変えてしまった。

年上の娘コンスタンスは一九一六年イースター蜂起に加わり、英国に死刑の判決を受けたが、恩赦を得て牢獄に入れられた。やがて出獄したが、無知で道理のわからぬ連中と共謀して孤独な人生をだらだらと長引かせている。

わたしは下の娘エヴァがどんな事を夢見ているのか知らないが、多分この世には無い理想郷であるようだが、とても老け込み、皺が目立ち、骨もあらわになるほどにやつれ果てている。とはいえさすがに世の政治と戦って生き抜いてきた人の姿をしている。

わたしは、かつて、ジョージア王朝を偲ばせる古いリサデルハウスの二人と語り合った想い出やわたし自身が抱いていたリサデルハウスへの思いや憧れを語ろうと思っては、何度も何度も繰り返して、その二人のどちらかの幻影を呼び出している。二人のあの青春時代の語らいを忘れることはできない。

やあ、お二人の幻影よ、今はもう、あなた方はすべてを知っておられる。正しいか、間違っているかという俗な判断で争いをすることが如何に愚かしいことであるか、よくご存知でおられる。

無垢で美しかったあのときは時とともに風化してしまう。時がすべてを変えていく。あなた方にとって、時ほど恐ろしい敵はない。さあ、立ち上がってわたしに、マツチをすれと命じなさい。一本で足りなければ何本でもすれと命じなさい。人々があなた方が生きていたことに気づくまですりつぶけよ、と命じなさい。・・・」

コンスタンスとイエイツ、どこに二人の接点があったのかよく分からないが、イエイツはコンスタンスの幻影を呼び出すことによって、「時代」や「時」の持つ意味を問い直し続けていたのではないだろうか。そして、コンスタンスの「嵐の人生は何のためにあったのか」繰り返し問いつづけ、その問を詩作をとおして後世に残していく詩人としての責任と使命を感じているのである。

註

(1) 論創社『アイルランドの風土と歴史』三三六頁

(2) 同右 三三七頁

参考書

山口書店『イエイツをめぐる女性たち』大浦幸男著

北星堂書店『W・B・イエイツ全詩集』鈴木弘訳

北星堂書店『イエイツ詩集』尾島庄太郎訳

論創社『アイルランドの風土と歴史』ムーディ、マーチン編著。堀越智監訳。

本の友社『イエイツ詩辞典』鈴木弘著

論創社『アイルランド独立運動史』森ありさ著

彩流社『アイルランドの歴史』リチャード・キレーン著。鈴木良平訳

中央公論社『物語アイルランドの歴史』波多野裕造著

- W. B. Yeats, *Memoirs*. (Macmillan London)
- Thomas Hennessey, *Dividing Ireland*. (Routledge)
- Joan Hardwick, *The Yeats Sister*. (HarperCollins)
- F. X. Martin, *Leaders and Men of the Easter Rising : Dublin 1916*. (Methuen)
- Edwards & Williams, *The Great Famine*. (Lilliput)